一色の海のくらしを発信しよう

一色漁業協同組合婦人部
部　長　　鈴木　すみ子

1　地域の概要

一色町は愛知県のほぼ中央にあり、三河湾の北西部に位置する穏やかな気候に恵まれた町である。人口約24,500人、面積22.4㎢の町で、沿岸漁業や養鰻など水産業が盛んである。他にも、大提灯まつり、えびせんべい製造、カーネーション栽培が日本一といわれている。

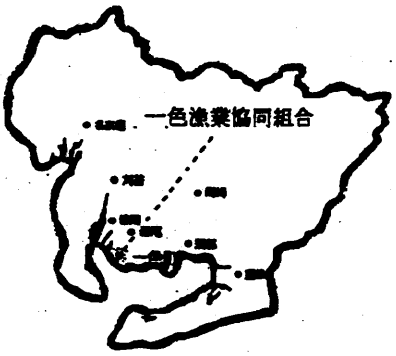

図１　一色漁協位置図

2　漁業の概要

一色漁業協同組合は、現在正組合員が１８４名、准組合員７３名の合計２５７名の組合員により組織されている。主な漁業は小型底引き網、採貝、のり養殖である。

3　研究グループの組織と運営

一色漁協婦人部の創設は昭和３７年で、現在１５６名の婦人部員が活動している。漁業の種類が異なることから、各婦人部員が異なる生活時間を送っており、活動の継続は困難な状況にある。しかし、婦人部が主体となり年２回の海浜清掃、消費者に楽しんでもらう潮干狩りを実施している。また、ゆとりある生活の心がけとして、アレンジフラワー、生け花、ペン習字といった文化教室を開催している。

西三河地域の漁協に所属する女性で構成する「矢作川をきれいにする会」に参加し、環境美化活動のパトロール、廃油を利用した天然石けんづくりなどの活動をしている。

4　研究・実践活動課題選定の動機

三河湾の魚は年々少なくなってきており、様々な原因があるといわれるが、私たちの目からみても海にゴミが大変増えている。生活排水が海の汚濁を進めていることも学び、将来への不安も抱えている。海の恩恵を受けて生活しているのは、漁業者だけでないため、多くの人に現在の海の状況を知ってもらう必要があると考えた。

また現在、一色漁協は比較的後継者に恵まれているが、今後も後継者が就業したいと思わせるような環境をつくりたいというのが、婦人部員共通の願いである。

そこで、女性の力でできることを考え、漁師の住む町に残る生活の文化を見直し、資料化することに決め、海のある暮らしの良さを次の世代や地域住民に伝える活動をすることとした。一年間の暮らしの中で漁業に関わりの深いものをカレンダーに、地域に点在する残していきたい風景などを、地図にまとめることにした。

5　研究・実践活動状況及び成果

（１）一色漁港海のくらしカレンダーの作成

一色漁港で年間の仕事を知るため、漁法や水揚げされる魚の種類を調べ始めた。

次に生活と年間行事を見直した。例えば、毎年８月２６日、２７日に諏訪神社で行われる大提灯まつりは、日本一の大きさを誇る６組の大提灯がならぶ華やかさで有名であり、漁師町に代々受け継がれてきたものである。広く知られるお祭りの他に、漁港周辺や生活の中の誇りに思うものや自慢したいものを調査することにした。婦人部員は４０から６０歳代が中心で、情報の偏りがあるため、婦人部のＯＧや高齢者から昔の暮らしや言い伝え等の聞き取り調査を行い情報を集めていった（図２）。

続いて食生活の見直しである。キンギョと呼んでいる魚を使ったはんぺんやつみれの鍋物は、それぞれの味が受け継がれる代表的なおふくろの味である。何気ない生活の中にも漁家の特徴的な食文化があることがわかった。お祝い事やお祭りには、現在では作られることの少なくなった箱ずしのような行事食もあった。消費者に魚のおいしい時期を知らせるため、一色漁港に水揚げされる水産物のおいしい時期を調べていった。

カレンダーを作る作業中、個展を開いている漁師仲間のＯＢがいると聞き、さし絵の協力を依頼した。地域に自慢したい名人がいることを、誇りに思うとともにこうした人材の発掘の重要性も感じた。集めた情報を、漁業の仕事、魚のおいしい時期、漁家に関わるお祭り・行事と食の３つの項目に分類し、海のくらしカレンダー（図３）を完成させた。

（２）一色漁港ウォーキングおすすめマップの作成

集めた情報を目で確認する点検作業を実施した（図４）。普段見慣れた漁港周辺で特長のあるものを見つけるのは難しい作業であるため、再度どのようなポイントで町を見直すか検討を行い、目に見える大切にしたい環境の１０ポイントを整理した（図５）。

ポイントをふまえて漁港周辺を歩き、残していきたいもの・集落の特徴的なもの・景観のよいところをあげていき、地図の上に整理した。漁港周辺に住んでいる人や訪れた人に歩いてみて欲しいと思うコースをのせてウォーキングおすすめマップ（図６）を完成させた。

（３）農山漁村女性活動交流会への参加

作成したカレンダーとマップの活用を考え、西三河地区の農山漁村の女性が集まる活動交流会に参加し発表を行った。農林業に携わる女性が積極的に消費者と交流する活動の発表を聞き、たいへんな刺激を受けた。

発表終了後に、普段は会う機会のない人達と自分たちの仕事について語り合うことができた。このなかで、水産物の消費が拡大するようにと調理法を紹介し、環境問題の大切さを訴えて海をきれいに保つための理解を求めた。林業者の方々も、漁業者と同じように環境を守ることに対して真剣に考えて活動をしており、今後も交流を深めていこうと意気投合した。

カレンダーとマップの作成が話題となり、地元ケーブルテレビの取材を受けた。お祭りに関わりの深い行事食を実際に作って見せ、地域文化の継承につながる活動ができた。

6　波及効果

漁業が地域の大事な産業のひとつとして残っていくために、消費者に海の現状を知ってもらうことが重要である。作成したカレンダーやマップが多くの人の目に触れ、漁港を訪れてもらい、きれいな海を取り戻すきっかけになるよう期待している。

また、婦人部員が語り部となり、次の世代を担う子供たちに漁業や地域の生活文化について聞かせ、地域ぐるみでの子供の教育に役立てられると考えている。

7　今後の課題や計画と問題点

カレンダー作成の際、水揚げされる水産物を使った料理の情報をたくさん集めたが、すべてを載せられなかった。貴重な生活の情報を、小さな子供や若い母親に伝えていく役割を担う必要があると考え、現在地域の子供会に呼びかけ、カレンダーとマップを使ったおはなし会、水産物をおいしく食べてもらうための調理実習の開催を企画中である。

環境点検の際には、ゴミの多さがたいへん気になり、婦人部員がもっと力を入れて環境美化活動を進めなければならないと感じた。

今回の活動を通じて、漁業と海のある暮らしの良さを再発見してもらえるよう、今後も努力していきたいと強く感じた。

図２　婦人部ハウスでの勉強会

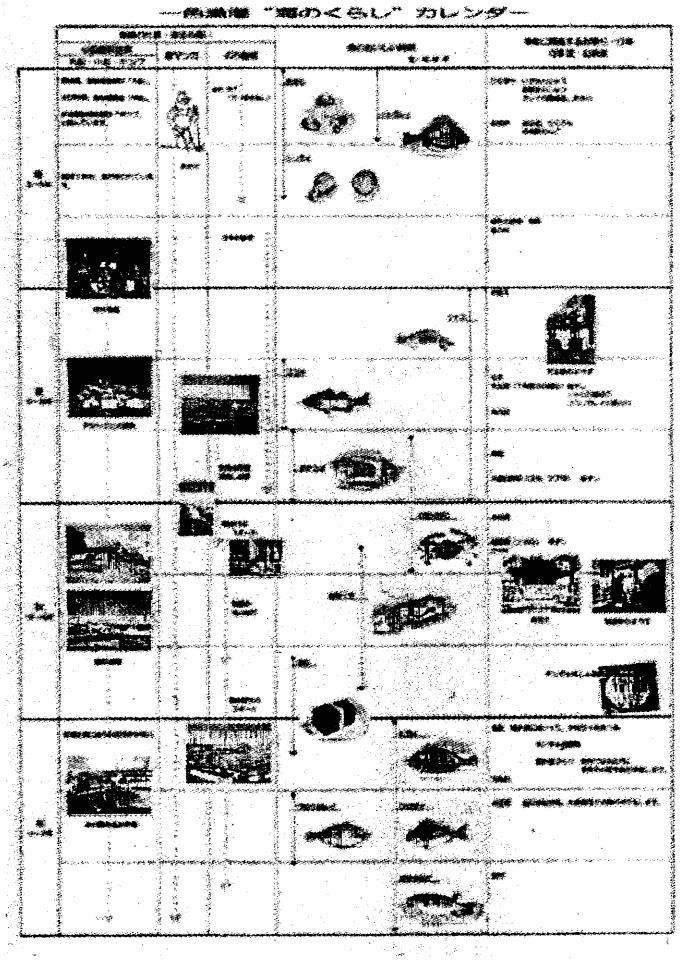

図３　海のくらしカレンダー

図４　漁港周辺の環境点検作業

① 眺めや景色がよい
② 由緒のある場所や建物
③ 海に親しみがもてるところ
④ 自然が残されているところ
⑤ 花見によいところ
⑥ 生け垣、庭先、畑などの手入れが行き届いているところ
⑦ 涼むのによいところ
⑧ 紅葉がきれいなところ
⑨ 散歩道によいところ
⑩ 自分が心地よい、好きだと感じるところ

図５　目に見える大切にしたい環境の10ポイント

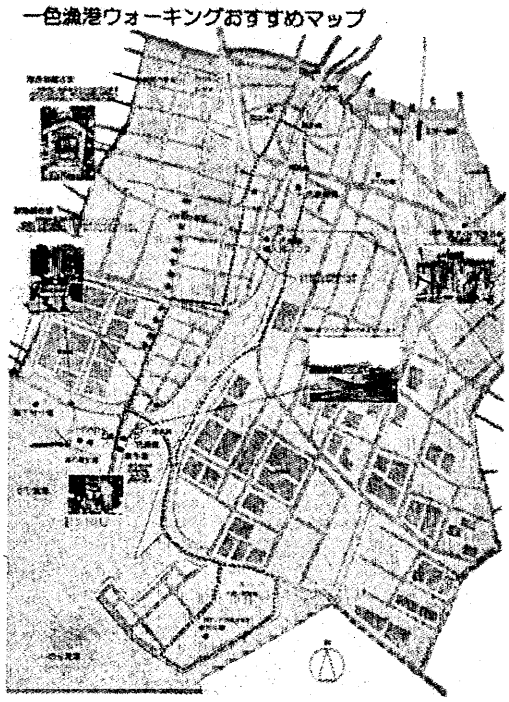

図６　ウォーキングおすすめマップ